

化学遺産に認定された宇都宮三郎に関する資料

藤原 秀之(図書館調査役<特別資料担当>)

2014年3月、早稲田大学図書館(以下、当館)が所蔵する桂川今泉文庫(洋学文庫のうち)に含まれるものを中心とする宇都宮三郎に関する資料が、その他の諸機関が所蔵する関連資料と併せて「化学技術者の先駆け 宇都宮三郎資料」として化学遺産に認定された。

ただ、「化学遺産認定」と言うだけでは、少々わかりにくいかもしれない。残念ながら、国宝や重文、さらには世界遺産などに比べるとその知名度は低いと言わざるを得ない。また、宇都宮三郎についても、よく知られていないのが実情であろう。そこで本稿では、「化学遺産」「宇都宮三郎」について略述し、あわせて今回の認定の経緯を記すことで、その意義を紹介したい。

まず化学遺産であるが、これは日本化学会が⁽¹⁾2009年度から「化学に関する歴史的に貴重な遺産を文化遺産、産業遺産として次世代に伝え、化学に関する学術と教育の向上及び化学工業の発展に資することを目的と⁽²⁾して認定を始めたもので、これまでに4回、計22件が認定されている。認定の基準によれば、日本における化学に関わる学術および技術の歴史を示す具体的な事柄・資料であって、化学の発展史上重要な成果を示すもの、国民生活、文化、経済、社会、教育に対して貢献したもののうち、江戸時代末期以降の近代化学、化学工業の成立、発展がなされた時代の資料を主な対象とする⁽³⁾とされている。

過去に化学遺産とされたものには「杏雨書屋所蔵 宇田川榕菴化学関係資料」(認定第1号)、「鈴木梅太郎ビタミンB1発見関係資料」(認定第13号)、「女性化学者のさきがけ 黒田チカの天然色素研究関連資料」(認定第19号)などがある。こうした資料群は、それぞれ一機関で一括して管理されている場合もあれば、複数機関にまたがって収蔵されているケースもある。今回対象となった宇都宮三郎に関する資料も、当館だけでなく他機関所蔵分とあわせて「化学技術者の先駆け 宇都宮三郎資料」として認定されるものである。以上が化学遺産についての概要である。続いて宇都宮三郎と当館が所蔵する関連資料について触れておこう。

宇都宮三郎(1834-1902)は、尾張藩士神谷義重の三男として名古屋車道(現・名古屋市中区)に生まれ⁽⁴⁾、10代半ばより甲州流軍学や和流の砲術を学び、その頃から神谷氏の本姓である宇都宮姓

を名乗るようになった。さらに西洋砲術を尾張藩士・上田仲敏のもとで学び、そこから舎密学(化学)への興味を深め、日本最初の化学書とも言われる『舎密開宗』(宇田川榕菴訳)を独学したという。その後江戸に出て、杉田玄白の孫にあたる杉田成卿に蘭学を学び、幕府奥医師を勤める蘭学者、桂川家の人々とも交流を深めることとなった。23歳で脱藩、27歳のとき勝海舟の推薦で蕃書調所精煉方出役、翌年には洋書調所教授手伝出役となるなど、幕府の洋学研究の中心に身をおき、維新後は新政府のもとで開成学校、のちに大学南校に出仕、また岩倉具視の欧米視察にも随行し、西洋の知識と技術に触れることとなった。そうした自身の経験と知識をいかし、セメント、耐火煉瓦、炭酸ソーダの国産化を進めるなど、68歳で亡くなるまで、化学の発展と具体的な成果の創出に尽力したのである。

宇都宮三郎に関する資料は、主に三郎の菩提寺である幸福寺(愛知県豊田市)に収蔵されている。そこには明治政府からの各種辞令や写真、勲章まで、関連資料の多くが所蔵されている。また造幣博物館(大阪市)には、炭酸ソーダ製造に関する資料が遺されている。今回、化学遺産に認定されるのは、これら2つの資料群に加え、当館が所蔵する関連資料である。

当館所蔵資料の中からは、三郎と交流のあった桂川家に遺された資料を中心に、次の7点が対象となった。(請求記号順)

- ①化学書染物の事 文庫8 J287
 - ②化学試験の方法 文庫8 J288
 - ③化学方程式 文庫8 J289
 - ④鉱泉試検法草稿 文庫8 J290
 - ⑤鉱泉試検法 文庫8 J291
 - ⑥宇都宮三郎書簡 文庫8 J294(2)
 - ⑦蝦夷地開拓ニ付建言書 文書12 巻154
- ①～⑥洋学文庫、⑦中御門家文書

認定作業は、日本化学会に設置された「化学遺産委員会」のメンバーを中心に進められる。委員による推薦や公募で寄せられた候補について、化学史上の意義について検討を加え、さらに所蔵機関に赴いて現物調査をおこない、委員会として候補資料を選定、化学会理事会への報告、承認を経て最終決定される仕組みとなっている⁽⁵⁾。

2011年9月、化学遺産委員会委員である新井和孝氏より当館に宇都宮三郎関連資料の化学遺産認定に向けた事前調査の依頼があった。当館ではすでに関連資料のほとんどについてその精細画像を「古典籍総合データベース」(<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki>)を通じて一般に公開しており、新井氏もそこに公開されている画像をご覧になった上で現物調査を申し出られたものであった。2012年8月、新井氏らが来室し対象となりうる資料を閲覧、2013年になってから認定に向けて、当館との間で具体的な意見交換がおこなわれた。当初は、化学遺産とはどういうものか、認定されることにより、当該資料の保存、公開に何らかの支障が生じることはないか、といった疑問もあったが、そうした疑問に対して新井氏はじめ化学遺産委員会から逐一丁寧な回答が寄せられた。最終的には2014年1月、化学遺産委員会から特別資料室にあてて「化学遺産の認定に関するご同意のお願い」が示され、それに対し図書館長名で同意書をお返し、正式に化学遺産に認定されることが決まったものである。

当館の洋学文庫といえば、杉田玄白肖像や芝蘭堂新元会図(オランダ正月)など一般によく知られた資料を含み、一括して重要文化財に指定されている大槻玄沢関係資料、さらには周防国(山口県)の医師・岡泰安がシーボルトから受けた「医学証明書」などが有名であり、宇都宮三郎に関する資料が話題にのぼることはあまりなかった。ただ、これらの資料も決して死蔵されていたわけではなく、す

で目録も公開され、前述のように古典籍総合データベースを通じて精細な画像をいつでも、どこからでも見るできるようになっている。

今回の化学遺産認定がきっかけとなって、公開されてはいるものの注目を浴びることの少なかった資料が一層活用されることを期待し、化学遺産認定の報告としたい。

<注>

- (1) 1878年に東京大学理学部の卒業生、在学生らによって設立、当初は化学会と称したが、会員の増加、東大以外への広まりを受けて、1921年に日本化学会となる。現在、会員数約3万人。
<http://www.chemistry.or.jp/societyguide/organization/history.html> 参照。
- (2) 日本化学会「化学遺産認定規則」(2011年制定)
- (3) 「化学遺産認定基準」(<http://www.chemistry.or.jp/know/2013/03/07/doc/ninteikijyun.pdf>) 参照。
- (4) 以下、宇都宮三郎については、①豊田市郷土資料館『舎密から化学技術へ 近代技術を拓いた男・宇都宮三郎』(豊田市教育委員会、2001年)、②日本化学会『「化学遺産」認定候補推薦書』(2013年)による。
- (5) 日本化学会「化学遺産認定制度推進体制図」2013年度。



化学遺産認定証(撮影:『ふみくら』編集委員会)